

東京薬科大学新聞

発行所 東京薬科大学新聞会

責任者 隈崎修孝

号外

永田先生・高村先生 御退職インタビュー

今春、東京薬科大学から二人の先生が御退職なさった。第二分析化学教室の高村喜代子先生と、公衆衛生学教室の永田穂先生である。昨年度、高村先生は二年生の分析化学と三年生の生物分析化学を、永田先生は公衆衛生学や応用統計学を私達に教えてくださった。

三月十五日には先生方の御

第二分析化学研究室

高村喜代子先生

高村喜代子先生は昭和三十四年、東北大学大学院理学研究科から当時上野にあった東京薬科大学女子部に赴任してこられた。最初に先生の本学での研究歴について語っていただいた。

「本学に着任してから、今までとは畑違いの薬学領域で自分の持っている方法論をどう活かすかを試みようかと思いま

退職を記念して最終講義も開講され、先生方の専門的な研究について講義がなされた。当日は年度末の慌ただしい時期であるにもかかわらず、たくさんの人々が訪れ、二人の人の厚さをうかがうことができた。

今回は高村先生、永田先生に貴重な時間を割いていただき、お話を伺ってみました。

をとりあげ、その電気化学反応の研究に着手しました。その後、色々な薬物や生体成分にも研究範囲を広げていきました。それが現在では「生体関連物質の高性能分析の開発と応用」という一連の研究に至っています」

先生が、いままでに行なった「生体関連物質の電気分析化学及び光分析化学的研究」に対し、一九九二年度日本分析化学会学会賞が授与されている。

次に、大学で行われる授業から学ぶことで、私たちが社会に出てからも活かしていけることはありますか、という質問に対し先生はこう答えられた。

「一つ一つの反応は小さいことかもしれない。でもそれが積み重なると、大きな変化へと導かれます。質問もそれと同じで、始めのうちは少しのことしか見えてきません。しかしそれが積み重なり、自分が高まっていくことで、より幅広い分野が見渡せるようになります。大学とは将来の可能性にあふれた多様性のある人を育てるところです。ここでは、社会に出てからの問題を解決していくための基礎となるべきことを教えているわ

けです。

実習では様々な現象をよく観察し色が変わった、きらきらとした結晶が出た、というような、様々な化学反応をよく観察し、同時に純粋な感動をもって見て欲しいです。そして、なぜこのような現象が起きたのだろうかという疑問を常に持ち、それに対する自分なりの解決法を探ることを試みて欲しいですね。そういった感動や、まだ自分の理解できない未知なるものに憧れて、より高いものを望んでいく姿勢が学問の第一歩です。さらなる努力にもつながるのではないのでしょうか」

先生はいつもいきいきと行動されていていらっしゃる。何か秘訣はあるのだろうか、お話を伺った。

「いま言ったことは、結局すべて自分が行っていることなんです。私には知りたいたことがたくさんあります。それを知れば知るほど、興味の対象が増えていき面白くて仕方がないのです。また、何でも積極的に行動するように心がけています。授業を例にあげれば元氣よく講義をすること、悪いと思った点は遠慮せずにはっきりと注意すること、学生を励ますことなどを心掛け

公衆衛生学研究室

永田稔先生

ています。自分の信念に対してまっすぐぶつかれば、表情もいきいきしてくるのではないでしょうか。そうすることで、エネルギーを消費するなんてたいしたことではありません。このように行動すること、私の中にはそれ以上のエネルギーが返ってくるのです。また、公私共によい人間関係に恵まれているのも理由の一つだと思います。だからこそ生きていくことが楽しいのです。何回生まれ変わっても人間になりたいですね」

最後に学生に対して一言頂いた。
「人生設計は他人から与えられるものではありません。自分自身のことなので、目的意識をはっきり持って、それに向かい情熱的に進んで下さい。実社会に出れば、新しいことに戸惑うこともあるでしょう。しかし、それまでに学んだことを活かし、どうせやるなら自信を持って堂々とチャレンジして行って下さい。そして、『進取の気性』を持って行動して下さい。もしその時、自分が劣っているのなら努力して補って下さい。そして新しい方法を創造し、開発していける人間になってもらいたいです」

永田稔先生は東京薬科大学の卒業生である。先生の学生時代について語っていただいた。

「当時は東薬は男女別学で男子部は新宿に、女子部は上野に校舎がありました。部活の合宿や薬祭のようなものがない限り、女子部との交流はほとんどありませんでした。私は入学してすぐに準硬式野球部に入部しましたが、夏合宿に参加できなかったため退部しました。その後は軟式テニスのサークルに入っていました」

続いて東薬卒業後の先生の進路についてお話を聞いた。
「家庭の事情もあって、実家に近い群馬大学医学部付属病院に就職しました。初めの三ヶ月ほどは無給でしたが、七月に薬剤師免許を取得し、同じ年の十一月には国家公務員の技官となりました。当時の病院では薬剤部などの名称はなく、薬局と呼ばれていました。初めの五年間は調剤室に勤務していましたが、そのこ

ろは手間を省くために、予製剤、約束処方というものがありました。これは病院内で手ぬり処方箋を記号化しておき、細かい処方箋を書く手間を省いたものです。午前中は外来の患者を受け付け、午後はこの約束処方の調剤をしていました。お金を節約するためにいろいろな工夫もしていましたね。注射液などはなるべく製薬会社から購入することはせずに、井戸水を蒸留したりして作っていました」

先生が公衆衛生学に初めて触れたきっかけについて話していただいた。
「群馬大学の薬理教室に東薬出身の後輩がいました。彼から、公衆衛生学教室で男性の薬学出身者を探しているという話を聞きました。これは薬局の仕事よりも面白そうだったので、いままでいた付属病院から研究室に移ることに決めました。初めは公衆衛生学について何も知らなかったのですが、助手をしながら勉強をしてみました。また、研究だけで

なくバレーボールをよくやっていた。裏庭バレー団なるものを結成し、運動生理の先生にコーチをしてもらって昼休みを利用して練習をしていました。だんだん熱中してきてしまっ、関東ブロック共済組合レクリエーション大会に参加したりもしたんですよ。群馬大学ではやりがいのある楽しい時間を過ごせました」

先生は十五年前に東薬に赴任された。そのきっかけが何であったのかを伺った。
「当時、公衆衛生学の研究室は医学部にしかありませんでした。それが文部省や厚生省などの働きかけで、薬学部では日本で初めて東薬に作られる事になりました。そのときに、学生時代に同期だった森学長に誘われたのです」

先生が専門とされている公衆衛生学についてもお話を伺った。
「薬剤師法の第一条で、薬剤師は薬剤を通じて国民の健康の保持、増進に寄与することと謳われています。このことからわかるように、環境など公衆衛生に関する研究は、薬剤師にとって大切です。私の研究室では、水をテーマの一つとして排水処理や水質の

維持、管理の研究をしています。また、生協の地下にある廃液処理施設の管理運営も行っていきます。薬学部では、三年生になると衛生化学の実習でここを使い、廃液処理の方法について勉強してもらいます」

最後に、東薬生に対して一言お願いした。

「東薬に入った理由は人それぞれですが、自分で選んだ以上、薬学で社会にどんな奉仕ができるかを考えてほしいと思います。いろいろな努力をしていけば、必ず道はひらけてきます。東薬の学生には自分を卑下することなく、もっと自信を持ってやってほしいと思います」



◎見出しを思いつかない・(ユギーズ)

∴免許をとってから一年。全然運転してないので保険料がもったいない。(アタミ)

★免許とろうとも思わず一年が過ぎた。薬剤師の免許のほうがいらいやね。(ウリ)

◎仮免許まで、あと少し。教習期限もあと少し(蟹道楽) 猫、ネズミ取りに捕まる。でも期限更新で逃げ。(猫)